

モンゴル語の主題標示

bol と *ni* の違いについて

那 日 蘇

0. はじめに

モンゴル語⁽¹⁾の *bol*⁽²⁾ は *bolbal* (「～になるならば」) という形が省略されてできたものである (橋本2019)。 *ni* は本来第3者に属する人物や物事を表す所有代名詞で、「第3人称所属語尾」と呼ばれているものである (フフバートル1993: 107)。 *bol* と *ni* は「主題」を表す機能において共通する (風間2003)。

本稿の目的は *bol* と *ni* が主題を表す場合、どのような違いを持つのかについて明らかにすることである。具体的には次の3点から考察する。まず、用例⁽³⁾の分布という観点から *bol* と *ni* を主題用法と主題以外の用法に分類し、主題以外の用法を主題用法と関連させながら、「主題」としての性格をより明確に導き出す。次に、主題性の高低という観点から、*bol* と *ni* が狭義主題文と広義主題文においてどのような違いを持つのを明らかにする⁽⁴⁾。最後に、叙述⁽⁵⁾類型論という観点から、*bol* と *ni* が「属性叙述文」と「事象叙述文」においてどのように用いられているのかを明らかにする。最終的に、*bol* と *ni* の主題を表す場合の位置付けをより明確に示すことを目的とする。

本稿は4節からなっている。第1節では先行研究⁽⁶⁾を概観し、問題点を明らかにする。第2節では *bol* と *ni* が主題を表すときの要件を明らかにする。第3節では上に述べた3つの観点から *bol* と *ni* が主題を表すときの違いを明らかにする。第4節では結果をまとめる。

1. 先行研究及び問題提起

主題標示という観点から *bol* と *ni* に関する先行研究を概観し、あわせて *bol* と *ni* の違いについてどのように記述されているのか確認した上で、問題点を明らかにする。

1. 1. *bol*, *ni*

風間 (2003) はモンゴル語において主題標示の不在を補う要素として *bol* と *ni* を取り上げているが、それらの違いについて触れていない。たとえば、風間 (2003: 285) は「アルタイ諸言語にははっきりとした主題専用のマーカーはなく、ゼロ形式である主格がテーマを兼ねている場合が多いようだ。しかしこうした主題マーカーの不在を補って働いている要素がいくつかある」と指摘する。

橋本 (2006b: 11) は *ni* は第 3 人称所属語尾として働く場合は「【人称性】」「【所有性】」「【指示性】」という 3 つの意味特性を持つと述べるが、その 3 つの意味特性が希薄化していくほど、*ni* は主題標示としての色合いが強くなると指摘する。その場合、「主語は【特定性⁽⁷⁾】と【卓立性⁽⁸⁾】がプラスの値を持ちトピックとしての性格を付与されるのに対して、述語は両方ともマイナスの値でコメントとしての性格を求められる」(p.20) という。このように、橋本 (2006b) では *ni* には所有用法⁽⁹⁾から主題用法に移行できるという特性があることが明確に述べられている一方、*bol* との対照はなされていない。

賽希雅拉図 (2014: 37) は日本語とモンゴル語の主題マーカーに関する対照をしており、*bol* を「典型的な主題マーカー」だと考えるのに対して、*ni* は主題標示ではないと指摘する。本稿と関連する内容について言えば、「主題」を表す *bol* は属性叙述文には用いられるが、事象叙述文には用いられないと言う。事象叙述文には「対比」の *bol* しか用いられない (賽希雅拉図 2014)。これに関して、那日蘇 (2021: 10) では「(中略) 事象叙述文に用いられている *bol* は常に「対比」という意味を帯びるという点で特殊 (あるいは制限的) な「主題」である」と主張する。賽希雅拉図 (2014) が *ni* を主題標示ではないと主張する理由は、(a) *ni* は疑問詞に付く (b) *~ ni bol ~* という形で用いられる場合がある⁽¹⁰⁾ (c) *ni* は主語焦点文や現象文に用いられる⁽¹¹⁾ という 3 点である。より詳しく説明すれば以下の通りである。*ni* が主題標示であれば指示対象が定まっていない疑問詞には付かないはずである (→ (a))。 *ni* に *bol* が後接することができるというのは片方しか主題を表さないことを示す。つまり、1 つの主題は 2 種類の形式で標示されることはない (→ (b))。また、*ni* が主題標示であれば日本語の主格標示「が」と同様に主語焦点文と現象文には用いられないはずである (→ (c))。しかし、*ni* に上で述べたような (a) ~ (c) の特徴があることをもって、*ni* に主題標示の機能が存在しないと考えるべきものではない。第 2 節で後述するように *ni* もある条件のもとでは主題標示の働きを持ちうると本稿では考える。

1. 2. *bol*, *ni* の違い

bol と *ni* が主題を表すときの違いについてナラントヤ (2010) は「*bol* は *ni* より恒常性が強く、真理や普遍的な事柄を表す場合に用いられる傾向」(p.130) があり、「*ni* は必ずしも真理や普遍的な事柄を表すとは限らない点で *bol* と異なる」(p.129) という。益岡 (2004) の叙述類型の観点に従えば、*bol* は「属性叙述文」に用いられやすいが、*ni* は必ずしもそうではないと解釈できる。ただし、ナラントヤ (2010) はこの点において詳しい説明をしていない。また、その結果を具体的に数値化していない。さらに、*bol* と *ni* が主題を表すのであれば、どのような要件のもとで成り立つのかについても明確に示されていない。特に、*ni* には賽希雅拉図 (2014) が指摘した通り、(a) ~ (c) のような使い方があるため、主題の要件を規定する必要があると考えられる。

以上、主題標示 *bol* と *ni* に関する先行研究の問題点をまとめると次のようである。

ア. 主題を表す場合の要件が明らかではない

イ. 用例数を具体的に数値化しておらず、両者の違いを明示的に示されていない

ウ．叙述類型論の観点からは対照されていない

エ．最終的には、*bol* と *ni* をどのように位置付ければよいのかが明らかではない

2. 主題の規定

本稿では以下、上記ア～エについて検討していくが、具体的な検討の前に「主題」という概念を規定しておく。主題を規定するにあたっては、「X は P」という主題文において①主題とは何か、②名詞句 X の特徴、③述部 P の中身の3点を規定する必要があると考えられる。日本語において、久野（1973）、丹羽（1999, 2000）、堀川（2012）では上に述べた3点について指摘されている。本節では、それらを参考にしてモンゴル語の *bol* と *ni* の「主題」の要件を明らかにする。

主題とは何かについて、丹羽（2000）では分かりやすく説明されている。丹羽（2000: 100）は「は」の働き、主題文、主題解説関係について（1）のように述べる。

- （1）「X は P」という文において、「X は」の部分を主題（あるいは題目、トピック）と呼び、この「は」の働きを主題提示と言う。それに対して P の部分は提示された主題に対する解説（あるいは説明、叙述、陳述、評言、コメント）を表す。このような主題解説関係をなす文を主題文（有題文）と言う。主題解説関係とは、文を X と P という二つの部分に分け、X について、それがどうであるか、どうなったかなどという説明を与えるという関係である。ごく端的に言えば、主題とは「X について」という関係を表す。

つまり、「X は P」という文において X が説明を与えられる対象、P が X に対する説明であり、「説明対象—説明内容」という意味関係を持つのが主題文である。本稿では主題の定義は丹羽（2000）に従う。

名詞句 X の特徴について、久野（1973）と丹羽（1999）は次のように述べる。久野（1973: 29-30）によると、日本語の主題となりうる名詞句は「総称名詞句⁽¹²⁾」と「文脈指示の名詞句⁽¹³⁾」でなければならないと言う。「誰か」のような指示対象が定まっていない名詞句は主題にならない。丹羽（1999: 507）では、主題となる名詞句の位置について「文頭が最もふさわしい」と指摘する⁽¹⁴⁾。以上をまとめると、名詞句 X は次の3点を備えなければならない。

- （2）（a）情報構造上は既知でなければならない
- （b）指示対象が定まっていて、特定できる名詞句でなければならない
- （c）統語論上は文頭でなければならない

述部 P の中身を規定するには、「X は P」という主題文がどのような意味関係を持つのかを規定すれば解決できる。尾上（1995: 31）では主題の要件として「②その成分が、後続部分の説明対象になっている」と述べる。つまり、尾上（1995）も丹羽（2000）と同じ

く、「X は P」という主題文は「説明対象—説明内容」の意味関係を持つと主張する。ただし、堀川（2012）は尾上（1995）の言う「説明対象」は何をもって「説明」と言っているのかは明確に規定しにくいと指摘する。たとえば、次の（3）と（4）は同じく「説明対象—説明内容」の意味関係を持っているが、異質である。

(3) 地球は丸い。

(4) 太郎はディズニーランドに行きました。

（3）の「丸い」は「地球」の属性と言えるが、（4）の「ディズニーランドに行きました」は「太郎」の属性とは言えない。ただし、「太郎」という話題に限定すれば、それに対して何らかの情報が与えられる。つまり、（3）においては述部が名詞句に対して+属性の値を持つが、（4）においては-属性の値を持つ。堀川（2012）は（3）のような形容詞文の主語に相当する成分を「狭義主題⁽¹⁵⁾」（p.187）、（4）のような話題を X に限定すれば、P が X に対して「何らかの情報が与えられる」（p.185）という場合の X を「広義主題⁽¹⁶⁾」（p.187）として分類した⁽¹⁷⁾。本稿では、狭義主題を持つ文を「狭義主題文」、広義主題を持つ文を「広義主題文」とする⁽¹⁸⁾。したがって、述部 P の中身は、狭義主題文において名詞句 X に対して+属性の値を持ち、広義主題文において名詞句 X に対して-属性の値を持つ。

以下では、日本語のこのような規定を *bol* と *ni* の主題を表す文で検証する⁽¹⁹⁾。次の（5）～（8）は *bol* と *ni* の主題を表す用例で、いずれも上で述べた主題の要件が適応される。

(5)	qariyačai	bol	ködelmüriči	yum,
	ツバメ	BOL	勤勉な	SFP
	「ツバメは勤勉です。」			
	(100万語コーパス:2433)			

(6)	bi	bol	kegür	ide-ǰü	bayi-n_a	siü	de.
	1	BOL	死体	食べる-CVB	いる-PRES	SFP	SFP
	「私は死体を食べていますよ。」						
	(100万語コーパス:5888)						

（5）では *qariyačai* 「ツバメ」という特定できる名詞句が *bol* によって提示されており、統語論上は文頭で、情報構造上は既知である。「ツバメ」に対して「勤勉な動物である」という属性を与えているため、狭義主題文に属する。（6）も（5）と同様に考えられるが、「死体を食べている」ということは *bi* 「私」の属性とは言えないため、広義主題文に属する。（6）の *bol* は対比の意味を帯びている。

- (7) *daray_a edür* **ni** *salki jibar* *ügei* *tungyalay* *sayiqan* *edür*
 翌日 NI 風 NEG 晴れ 綺麗な 日
bol-ba .
 になる-PAST
 「翌日は風がなく、晴れた日になりました。」 (100万語コーパス:3602)

- (8) *qarin* *tere* *amitan* **ni** *čičiköw-i* *mön* *yeke*
 しかし その こいつ NI チチコワ-ACC まだ とても
sirte-n *qara-n_a*.
 注視する-CVB 見る-PRES
 「しかし、そいつはまだチチコワを見つめています。」 (100万語コーパス:5137)

(7) では *daray_a edür* 「翌日」という時間名詞句が *ni* によって提示されており、統語論上は文頭で情報構造上は話し手と聞き手にとって知られている情報である。「風がなく、晴れた日」は「翌日」の一種の属性と言える。(8) の *tere amitan* 「そいつ」は (7) と同様に主題になる名詞句の要件を満たす。述部の「チチコワを見つめている」は一時的な動作であるため、－属性の値を与えている。

ただし、*ni* の用例の中で主題になる名詞句 X の特徴を満たし、「説明対象—説明内容」の意味関係を持っていたとしても、主題標示として解釈できない場合がある。それは *ni* が人称性と所有性を持つ場合である。本稿ではそのような用例を主題の用法から除く。

- (9) *tegün-ü* *ner_e* **ni** *uyunbatu* *ge-deg*.
 3-GEN 名前 NI オヨンバトゥ と言う-VN
 「彼の名前はオヨンバトゥと言います。」 (100万語コーパス: 5319)

- (10) *tegün-ü* *qubčasu-bar* *teyimü* *küisü-yin* *kümün* *ge-jü*
 3-GEN 服-INST そのような 性別-GEN 人 と-CVB
kele-kü-dü *tung* *kečegüü* *bayi-l_a* . *debel* **ni**
 言う-VN-DAT とても 難しい ある-PRES 服 NI
yay *emegtei kümün-ü* *ki* *siy* *bayi-γsan*
 まるで 女の人-GEN 3POSS ～のような ある-VN
 「彼の服でそのような性別の人と言うのはとても難しいです。(彼の) 服はまるで女
 のようでした。」 (100万語コーパス: 5136)

(9) において *tegün* 「彼の」という代名詞が用いられていることで、その「名前」は「彼の名前」であることは明確である。(10) の *debel* 「服」は先行文脈から「だれかの服」であることは判断できるため、その所有者が省略されているタイプと考えられる⁽²⁰⁾。

以上をまとめると、日本語の「主題」の要件はモンゴル語の *bol* と *ni* にほぼ当てはま

る。ただし、*ni* の場合は人称性と所有性が維持されないことが前提となる。なお、本稿で扱う主題の範囲は主に平叙文の主語を対象としたものである。○○+*bol/ni* の形を主題の典型的な形だと考えるが、○○+格語尾+*bol/ni* の形をしたものの中で、主題の要件を満たすと判断できる場合は主題として扱う。用例収集の際には○○+*bol/ni* という形以外に、○○+*gedeg bol/ni* (「とは」) という形も少数あった。本稿はそのような形式も含めている。

以下、このような規定のもとで、*bol* と *ni* の主題を表すときの違いを考察する。

3. 考察

bol は全部で750例、*ni* は全部で1562例収集した。そのうち、500例は主題用法であり、残りは主題以外の用法である。本節では、主題標示 *bol* と *ni* の違いを用例の分布、主題性の高低、叙述類型論という3つの観点から明らかにする。

3. 1. 用例の分布から

bol を主題用法と主題以外の用法に分けた。表1は *bol* の用例全体の内訳である⁽²¹⁾。*bol* は主題を表す場合は対比の意味を帯びる場合と帯びない場合がある。前者は「+対比」、後者は「-対比」と示す。主題を表さない場合は仮定、または文末で疑問や残念な気持ちを表す文末用法⁽²²⁾がある。主題の働きのない対比だけ⁽²³⁾を表すこともある。

表1. *bol* の用例全体の内訳

		割合 (用例数)
主題用法	+対比	4.5% (34)
	-対比	62% (466)
	小計	66.5% (500)
主題以外の用法	仮定用法	28% (208)
	文末用法	5% (38)
	対比専用用法	0.5% (4)
	小計	33.5% (250)
合計		100% (750)

表1で示すように、*bol* の主題用法は主題以外の用法より高く、66.5%に達する。その中で対比の意味を帯びるものはわずか4.5%である。続いて、仮定用法は28%を占めており、文末用法と対比専用用法は5%と0.5%であった。Hammar,Lucia B. (1983) では *bol* の中心的な用法は主題用法と対比用法であると指摘されているが、今回のデータを見ると、*bol* は主題用法と仮定用法を中心に用いられることが分かる。

(11) ~ (13) は *bol* の主題用法である。

おとなしいです。」

(100万語コーパス: 6479)

(14) では *bol* は *itege-kü ügei* 「信じないなら」に後接して仮定の意味を表す。(15) では *bol* が文末で疑問を表す用法として用いられている。(16) では *bol* は「胸」に後接し、「口上は～猛烈だが、胸は～おとなしい」ということが対比されている。名詞句 + *bol* は文中に置かれているため、主題の要件を満たさない。*tere* 「彼」が文の主語の位置に立つ。

表 2 は *ni* の用例全体の内訳であり、*bol* と同様に主題用法と主題以外の用法に分けた⁽²⁶⁾。

表 2. *ni* の用例の内訳

用法	下位分類	割合 (用例数)
主題用法	+対比	2% (39)
	-対比	30% (461)
	小計	32% (500)
主題以外の用法	所有用法	36% (555)
	名詞化用法	12% (182)
	前方／後方照応的指示用法	10% (154)
	非特定用法	2% (37)
	焦点標示用法	1% (25)
	対比専用用法	0.7% (11)
	モダリティ用法	0.6% (9)
	部分標示用法	0.5% (8)
	その他	5.2% (81)
	小計	68% (1062)
	合計	100% (1562)

ni も主題を表す場合は *bol* と同じく、対比の意味を帯びる場合と帯びない場合がある。主題以外の用法で用いられる場合は所有用法、名詞化用法、前方／後方照応的指示用法、非特定用法、焦点標示用法、対比専用用法、モダリティ用法、部分標示用法がある。それ以外の場合は「その他」に分類した。表 2 で示すように、*ni* の主題用法は32%に過ぎないのに対して、主題以外の用法は68%に達した。主題用法の中で対比の意味を帯びるのは2%である。主題以外の用法の中では、所有用法の割合はもっとも高く、36%を占める。以下、主題以外の用法の割合が全体の中でもっとも多かったため、この用法から先に見ていく。

所有用法の *ni* は (9) と (10) のように人称性と所有性を有する場合である。

名詞化用法の *ni* について橋本 (2006a: 407) は「限定的な修飾語句と一緒にあって名詞化の機能を発揮する」と定義し、形容詞と形動詞のような名詞的な要素に後接すると指摘する⁽²⁷⁾。

- (17) inggi-jü bodo-qu **ni** tayara-qu ügei.
 こうする-CVB 考える-VN NI 間違う-VN NEG
 「このように考えるのは間違っています。」 (100万語コーパス: 5199)

(17) の *ni* は *bodo-qu* という形動詞に後接し、「このように考えるのは～」というコトを修飾する⁽²⁸⁾。

前方／後方照応的指示用法は「名詞句＋格語尾」に付くタイプである。

- (18) bi ariki-yi **ni** qalaya-ju egüde-n-ü bošoγ_a
 1 酒-ACC NI 温める-CVB 門-不定の *n*-GEN 敷居
 deger_e talbi-ju ög-be.
 上 置く-CVB あげる-PAST
 「私は（その）お酒を温めて敷居の上に置いてあげました。」(100万語コーパス:4010)

(18) の *ni* は *ariki-yi*（お酒＋対格）に付き、「私は（彼らの飲んでいるその）お酒を～」のような前方照応的指示の意味がある⁽²⁹⁾。

非特定用法とは *ni* が *ali*「どれ」、*ken*「だれ」のような指示対象が定まっておらず、特定されない疑問詞に後接して用いられる場合である。

- (19) ali **ni** činü bui ?
 どれ NI 2GEN QP
 「どれがあなたのですか？」

ni が疑問詞 *ali*「どれ」、*ken*「だれ」に後接する場合はいくつかの項目が列挙され、その中から *ali ni*～?「だれが～?」、*ken ni*～?「どれが～?」と聞くことが前提となることが自然である。なお、ナラントヤ（2010）は *bol* には文頭でかつ疑問詞に付く用法はないと指摘するが、100万語コーパスの中に *bol* は文頭でかつ疑問詞に後接する用例があった⁽³⁰⁾。

- (20) yayu **bol** jingkini γuw_a sayiqan bol-qu-yi mede-gül-jü,
 何 BOL 本当の 美しい である-VN-ACC 認識する-CAUS-CVB
 「何が本当の美しさなのかを認識させて、…。」 (100万語コーパス:1737)

ただし、*bol* には *ni* のように疑問詞 *ali*「どれ」、*ken*「だれ」に付く用例はなかった。したがって、*bol* は特殊な場合しか用いられないと考えられ、決して *ni* のように常に疑問詞に後接するというわけではない。

焦点用法の「焦点」には「伝達したい中心となる情報」であり、情報構造上で既知に当

(24) において *dörbedüger jüil* 「4 種類目」は 4 種類、あるいはそれ以上の種類のうちのものであると想定される。その場合の「4 種類目」は *ni* によって標示される。同様に (22) で用いられる対比専用の *ni* は、最初は「私たち 2 人」という枠が設定され、それが「1 人」、「1 人」に分かれる場合に *ni* によって標示されている。したがって、これも部分標示の用法と関連すると考えられる。以上が *ni* の主題以外の用法である。

次に、*ni* の主題用法の具体例について見ていく。

- (25) *čidaburi* **ni** *jang mural-un* <<*tusalamji*>>-ača *čay imayta*
能力 NI 人徳-GEN 助け-ABL いつまでも
sal-ju *čida-qu* *ügei* .
離れる-CVB できる-VN NEG
「能力はいつまでも人徳の助けから離れられないです。」 (100万語コーパス: 1850)

- (26) *egün-ü* *emüneki* *gesigün* **ni** *qoyinaki* *gesigün-ü-ben*
これ-GEN 前の 部分 NI 後ろの 部分-GEN-REFL
čiqula *nököčel*, *qoyinaki* *gesigün* **ni** *emüneki*
必要 条件 後ろの 部分 NI 前の
gesigün-ü-ben *güičed* *nököčel* *bolo-n_a*.
部分-GEN-REFL 十分 条件 である-PRES
「この前の部分は後ろの部分の必要条件であり、後ろの部分は前の部分の十分条件です。」 (100万語コーパス: 4828)

(25) において *čidaburi* 「能力」という名詞が文頭に置かれ、情報構造上は既知である。それが述部の「いつまでも人徳の助けから離れられない」の説明対象になる。(26) では「前の部分」は「後ろの部分の必要条件である」、「後ろの部分」は「前の部分の十分条件である」と説明されているが、対比も表す。なお、*emüneki gesigün* 「前の部分」と *qoyinaki gesigün* 「後ろの部分」のように物事の「部分」を表す名詞に *ni* が付いているのは部分標示の *ni* と関連すると考えられる。以上、用例の分布という観点から *bol* と *ni* を主題用法と主題以外の用法に分類し、数値化した上で用法ごとに具体例を取り上げた。

まず、表 1 と表 2 で得られた数値を見ると、*bol* の主題用法が全体の 66.5% を占めるのに対して、*ni* は 32% に過ぎない。*ni* の主題以外の用法は主題用法より多く、全体の 68% に達する。*ni* に主題を表す機能があるのは確かではあるが、主題を表す頻度は *bol* より低いと考えられる。次に、表 2 と表 3 で分類した用法から見ると、*bol* は主に「主題」と「仮定」に集中して用いられているが、*ni* は様々な意味で用いられており、分散的な性格を持つ。たとえば、*ni* は、情報構造上は既知で特定できる名詞句に付いて「主題」を表すことができる一方、それとは全く反対の名詞句、つまり情報構造上は未知で特定できない名詞句（疑問詞）に付いて「非特定」を表すこともできる。また、*ni* は物事の「部分」を表す名詞句に付きやすい。そのような性格が「対比」を表す場合にもっと明確になる。

そこで、1つ考えられるのは *ni* の主題を表す働きは「部分」を表す機能とも関連するということである。つまり、*ni* の（全体の中から）部分を取りたてるという機能が弱化し、総称名詞句、あるいは物事の「全体」を表す名詞句を取りたてると、主題らしくなり、主題を表す色合いが強くなると考えられる⁽³⁵⁾。以上のことから考えると、*ni* の主題を表す機能はその内部的な働きによって与えられたものではなく、むしろ外部的な要因が関連しており、主題らしく見られるようになっていいると考えられる。それに対して、*bol* は外部的な要因が少なく、内部的な働きによって「主題」の機能が与えられると考えられる。その意味で、*bol* は主題を表す機能において *ni* より典型的であると言える。

3. 2. 主題性の高低から

丹羽（2000）は述部 P が恒常的な属性を表す場合は主題性が高く、一時的な場合はより周辺的であると指摘する。第2節で主題を規定した際に、述部 P の中身が名詞句 X に対して+属性の値を持つ場合を狭義主題文、－属性の値を持つ場合を広義主題文とした。すなわち、狭義主題文の名詞句 X は主題性が高く、広義主題文の名詞句 X は主題性が低いと考えられる。したがって、本節では *bol* と *ni* の主題性の高低を狭義主題文と広義主題文において考察する。狭義主題文の述語は基本的に名詞述語と形容詞述語であり、広義主題文の述語は動詞述語である。ただし、これはあくまで基本的な用法に限って言ったもので、動詞述語が属性を表す場合もある（益岡1987）。表3は *bol* と *ni* の狭義主題文と広義主題文における割合である。

表3. 狭義主題文と広義主題文における *bol* と *ni* の割合

主題文	述語	<i>bol</i> (用例数)	<i>ni</i> (用例数)
狭義主題文	名詞述語	65% (326)	30% (150)
	形容詞述語	6% (32)	9% (47)
	動詞述語 (+属性)	15% (73)	7% (33)
	小計	86% (431)	46% (230)
広義主題文	動詞述語 (－属性)	14% (69)	54% (270)
	合計	100% (500)	100% (500)

表3を見ると、*bol* 主題文において述部 P が名詞句 X に対して+属性の値を持つものは86%に達するのに対して、*ni* 主題文において46%に過ぎなかった。述部 P が名詞句Xに対して－属性の値を持つ場合、*bol* 主題文は14%に過ぎないのに対して、*ni* 主題文は54%に達した。すなわち、*bol* の主題性が *ni* より高いと考えられる。

(27) は *bol* の狭義主題文、(28) は広義主題文の用例である。

(27) olan tümen-ü üjelte **bol** jöb yum.
 大衆-GEN 観点 BOL 正しい SFP

「大衆の観点は正しいです。」

(100万語コーパス: 1861)

- (28) ene **bol** yosolal-un anggi bolbasural ki-ǰü bayi-n_a,
 これ BOL 儀仗-GEN 隊 訓練 する-CVB いる-PRES
 「これは儀仗隊が訓練をしています。」 (100万語コーパス: 425)

(27) では「大衆の観点」は「正しい」という性質を持ち、(28) では「～訓練をしている」という一時的動作を表すもので、－属性の値を与える。

(29) は *ni* の狭義主題文、(30) は広義主題文の用例である。

- (29) ene **ni** mayu ǰangsil yum.
 これ NI 悪い 習慣 SFP
 「これは悪い習慣です。」 (100万語コーパス: 2426)

- (30) aǰu aqui-yin ür_e asiγ **ni** ulam nemegde-kü tölöb-tei
 経済-GEN 効果 NI さらに 向上する-VN 見込-COM
 bayi-n_a.
 ある-PRES
 「経済効果はさらに向上する見込です。」 (100万語コーパス: 1283)

(29) の *ene* 「これ」は先行文脈の「耳をほじくる」という動作を指しており、それが「悪い習慣」であるということを示している。(30) では「経済効果」について「向上する見込である」という一時的な状態を説明しているため、－属性の値を与える。

以上をまとめると、狭義主題文において *bol* が多く用いられるのに対して、*ni* はその半分の割合でしか用いられない。広義主題文において、*ni* が多く用いられる傾向を持つものに対して、*bol* はかなり少ない割合でしか用いられない。すなわち、両者の違いを主題性の高低から見た場合も *bol* は主題性が高く、*ni* は主題性が低かった。

ただし、述部 P の内実をさらに詳しく見ると、＋属性の値を持つ場合は「本質的な属性」—「内在的属性」—と一定の時間的限定のもとで成り立つ「可変的な属性」—「非内在的属性」⁽³⁶⁾ (益岡2000: 43) に分けられる。－属性の値を持つ場合は「或る時空間に存在する静的な事態」(「状態動詞」)—「静的事象」—と「或る時空間で実現する出来事」(「動作動詞」)—「動的事象」—に分けられる (益岡1987: 27)。益岡 (1987: 21) は述部が対象の属性を叙述するものを「属性叙述」、事象を叙述するものを「事象叙述」とし、属性叙述命題を含む文を「属性叙述文」、事象叙述命題を含む文を「事象叙述文」と呼ぶ⁽³⁷⁾。したがって、最後に叙述類型論の観点から主題を表す *bol* と *ni* の性格をさらに詳しく考察する。

3. 3. 叙述類型論の観点から

表4は表3のもとで作られたものではあるが、叙述類型論の観点から述部 P が＋属性の値を持つ場合 (属性叙述文) を内在的属性と非内在的属性に、述部 P が－属性の値を持つ場合 (事象叙述文) を静的な事象と動的な事象に分類し、数値化したものである。

表 4. 属性叙述文と事象叙述文における *bol* と *ni* の割合

		<i>bol</i> (用例数)	<i>ni</i> (用例数)
属性叙述文	内在的属性	59% (294)	29% (144)
	非内在的属性	27% (137)	17% (86)
事象叙述文	静的事象	11% (55)	32% (160)
	動的事象	3% (14)	22% (110)
	合計	100% (500)	100% (500)

表 4 を見ると、*bol* 主題文は内在的属性を表す文が圧倒的に多く、59%を占めており、動的事象を表す文にはわずか3%で、もっとも少ない。すなわち、*bol* 主題文は内在的属性叙述と動的事象叙述を両極とし、多から寡への段階性をなしている。一方、*ni* 主題文は非内在的属性を表す用例はもっとも少ないが、それ以外のものについてはほぼ均等に用いられ、*bol* のような段階性を認めることができない⁽³⁸⁾。

次の (31) と (32) は *bol* と *ni* の内在的属性を表す用例で、(33) と (34) は非内在的属性を表す用例である。

- (31) kele **bol** kümün törölkiten-ü qamug-un čiqula qarilča-qu
 言語 BOL 人類-GEN もっとも-GEN 重要な 交流する-VN
 baɣaʃi mön.
 ツール SFP
 「言語は人類のもっとも重要なコミュニケーションツールです。」
 (100万語コーパス: 4336)

- (32) ene qobor nandin čečeg **ni** delekei-yin qobor erdeni～～
 この 貴重な 花 NI 世界-GEN 宝物
 「この貴重な花は世界の宝物です。」
 (100万語コーパス: 4926)

(31) の「言語」が「～コミュニケーションツールである」というのは一般論である。
 (32) の「この貴重な花」は「世界の宝物」というカテゴリーに属する。いずれも時間の制約を受けない本質的な属性を表すタイプである。

- (33) ta-n-u ene bariyada **bol** uridu-dayan
 2-不定の *n*-GEN この (生産) 隊 BOL 昔-DAT.REFL
 qabi töśör-tegen ner_e-tei bayan ayil bayi-ɣsan-i bi
 付近-DAT.REFL 有名-COM 金持ち 村 ある-VN-ACC 1
 mede-ǰü bayi-n_a .
 知る-CVB いる-PRES
 「あなたの (生産) 隊は昔付近で有名な金持ちの村であったことを知っています。」

(100万語コーパス: 6583)

- (34) getel_e, ebesü **ni** basa uy-un yangju-bar-iyān nariqan
 でも 草 NI も もと-GEN 様子-INST-REFL 細い
 mörtēgen boyoni bayi-l_a.
 そして 低い いる-PAST
 「でも、草も元のままで、細くて背が低いです。」 (100万語コーパス: 3014)

(33) の「(生産) 隊」は「有名な金持ちの村であった」という属性を持っているが、過去のことであるため、可變的な属性として捉える。(34) の *ebesü* 「草」は「細くて背が低い」という特徴を持っているが、「今見たときに～」のようなテンスを関連させることができるため、可變的な属性であると考えられる。

次の (35) と (36) は *bol* と *ni* の動的な事態を表す用例で、(37) と (38) は静的な事態を表す用例である。

- (35) nara bultayi-qu üy_e-dü čimeg traktor **bol**
 太陽 出る-VN とき-DAT チムゲ トラクター BOL
 qoyitu жүг yabu-ju bayi-n_a gesen-i todo mede-be.
 北 方面 向かう-CVB いる-PRES こと-ACC よく 知る-PAST
 「太陽が出てきたときに、チムゲはトラクターが北に向かっていることをよく知っていました。」 (100万語コーパス: 6709)

- (36) čerig-üd-ün jarim **ni** aryal tegü-kü-ber, jarim
 兵士-PL-GEN ある兵士 NI 牛の糞 拾う-VN-INST ある兵士
ni mori-d-iyān belčigerlegül-kü-ber yaru-l_a.
 NI 馬-PL-REFL 放牧する-VN-INST 行く-PAST
 「兵士たちのある兵士は牛の糞を拾いに、ある兵士は馬を放牧しに行きました。」 (100万語コーパス: 3599)

(35) では複文の中で *bol* が用いられており、「トラクターは北に向かっている」という一時的な動作を表し、対比の意味を帯びる。(36) では「ある兵士は牛の糞を拾いに行った」と「ある兵士は馬を放牧しに行った」とが対比されている。述部は一時的な動作を表す。また、*čerig-üd* 「兵士たち」という全体を表す名詞句が *jarim ni* という形で「ある兵士」に分かれていることは部分標示の *ni* に類似している。

- (37) idesi-n-ü xeregčege **bol** neliyed urtu qugučaga-n-du
 食べ物-不定の n-GEN 需要 BOL かなり 長い間-不定の n-DAT
 medegde-n_e,
 発見される-PRES
 「食べ物の需要はかなり長い間に発見されました。」 (100万語コーパス: 3984)

- (38) ene **ni** kelelgen ügei tegün-dü edüi tedüi erke čilöge-yi olyu-ba.
 これ NI もちろん 3-DAT 少しばかり 自由-ACC 与える-PAST
 「これはもちろん彼に少しばかりの自由を与えました。」 (100万語コーパス: 141)

(37) の「食べ物の需要」は「～発見された」とは静的な事態を表している。(38) の「これ」は「～自由を与えた」も同様に考えられる。(37) の *bol* は (35) と同じく対比の意味が強い。

なお、次の (39) と (40) は動詞が属性を表すとして用いられる用例である。

- (39) qalimu **bol** dalai tanggis-tu amidura-day
 クジラ BOL 海洋-DAT 生活する-VN
 「クジラは海洋に生活します。」 (100万語コーパス: 2656)

- (40) nige-dü ene üge-nügüd **ni** dotoyadu yadayadu-yin ulus törö yin
 一つ-DAT この 言葉-PL NI 国内外-GEN 政治-GEN
 yeke ağıllay_a-yi medegele-gsen jokiya-du yar-day yum.
 大きい 活動-ACC 報道する-VN 文章-DAT 出る-VN SFP
 「一つは、この言葉は国内外の政治大活動を報道する文章に出るのです。」
 (100万語コーパス: 3700)

(39) では *ni* は *amidura-day* 「生活する」のような反復、習慣を表す形動詞語尾 *-day* に後接し、「クジラは海洋に生活する」は繰り返して行われていることを表す。すなわち、クジラの特徴だと言える。(40) では *ni* が *yar-day* 「出る」という形動詞語尾に後接し、「いつも国内外の～文章に出るのである」という意味を表し、「この言葉」の特徴になっていると考えられる。以上、叙述類型論の観点から見た場合も *bol* は属性を表す文に用いられやすい傾向を持つのに対して、*ni* は事象を表す文に用いられる傾向を持つ。

4. おわりに

本稿では、モンゴル語の *bol* と *ni* の主題を表す場合の違いを具体的な数値を利用して用例の分布、主題性の高低、叙述類型論という 3 つの観点から対照した。本稿では最終的に *bol* と *ni* を次のように位置付ける。「主題」を表すという機能において、*bol* はより積極的で典型的な形式であると考えられるのに対して、*ni* は相対的に消極的で臨時的に、

あるいは派生的に用いられている。

略号一覧

ABL:ablative ACC:accusative CAUS:causative CVB:converb COM:comitative
 DAT:dative-locative GEN:genitive INST:instrumental NEG:negative
 PAST: past tense PL: plural POSS: possessive particle PRES: present tense
 QP: question particle REFL: reflexive SFP: sentence final particle VN: verbal noun
 1: first person 2: second person 3: third person _: 語末分かち書き母音 -: 接辞境界

【注】

- (1) 本稿で扱うモンゴル語は、内モンゴル自治区で標準語として位置づけられているチャハル方言を対象としたものであるが、*bol*, *ni* の主題用法に関する方言差はそれほど大きくないと考えられるため、モンゴル国のハルハ方言に関する文献も参照にする。
- (2) モンゴル文字で書かれたものを引用する際に、モンゴル文字の綴りに従いローマ字に転写する。転写方法はフフバートル (1993) に従う。なお、モンゴル語の用例、および中国語、英語の文献の日本語訳は筆者による。また、本文で取り上げた用例の中で出典を書いていないのは作例である。
- (3) *bol* と *ni* に関する用例は内モンゴル大学で構築された *100 tümen üge-tei odo üy_e-yin mongyol keles bičig-ün deyita kömörke* (100万語の現代モンゴル語のコーパス) というコーパスを利用し、AntConc という検索ソフトを用いて収集する。このコーパスは小中学校、高校で使われているモンゴル語教科書や文学作品、新聞記事などからなっている (すべて、1949年以降のもの)。以下、100万語コーパスと略す。
- (4) 第2節で後述するように、本稿では「X は P」という主題文を述部 P が名詞句 X に対して + 属性の値を持つのか、- 属性の値を持つのかによって「狭義主題文」と「広義主題文」に分ける。
- (5) 益岡 (1987: 20) の提案したものであり、「叙述」とは「現実世界を対象として或るひとまとまりの事柄を概念化すること」である。それには「属性叙述」(「或る対象と或る属性とを結びつける、という内容の叙述」) と「事象叙述」(「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象 (出来事や静的事態) を叙述する」) という2つの類型がある (益岡1987: 21)。
- (6) 「主題」に関する定義やその要件は日本語の先行研究を参照し規定する。
- (7) 特定のとは「トピックされた名詞句は、話し手に同定可能か、話し手と聞き手の両方に同定可能な対象を指示する。その意味で、特定の (specific) な性質を持つ」ということを言う (橋本2006b: 14-15)。
- (8) 名詞句が取り立てられているという意味で言われているものである。(橋本2006b)
- (9) 本稿では、*ni* は第3人称所属語尾として用いられるときの用法を「所有用法」と

呼ぶ。

- (10) 賽希雅拉図 (2014: 55) によると、(b) のように用いられる *ni* は「節を名詞化する」役割と「前方照応的指示」の2つの役割を持つと言う。
- (11) 主語焦点文とは、たとえば「君が主役だ」において「君」が伝えたいことになっている文のことであり、現象文とは、たとえば「鳥が飛んでいる」のように「目の前の出来事をありのまま描写する文」である (賽希雅拉図 2014: 56)。
- (12) 総称名詞句とは「名詞句に関しては、特定の個体ではなく、ある種類 (kind) 全体を指すもの」である (石居2014: 361)。
- (13) 文脈指示の名詞句は「既に登場した人物を指す名詞句か、話し手と聞き手との間で、指示対象が明らかな名詞句」である (久野1973: 29)。
- (14) ただし、主題は「きのう運転免許の試験を山田さんは受けました。」のように文中に置かれる場合もある (丹羽1999: 507)。その場合、「山田さん」は「前方照応で主格名詞」といったほかの条件が必要となる (丹羽1999: 508)。本稿では、主題となる名詞句は統語論上文頭でなければならないと規定しているが、絶対的ではない。
- (15) 堀川 (2012) では形容詞文の主語は狭義主題の代表であると述べられているが、そのほかにいくつかのタイプも含まれている。詳しくは堀川 (2012: 187-188) を参照。
- (16) 「共同注意」が向けられる対象を広い意味での主題として扱う (堀川2012: 185)。
- (17) なお、堀川 (2012) の言う狭義主題とは「断裂要件」(「X は P」という主題文において、X と P は「表現上の立場として前後に大きな断裂を含む」(p.5) こと) と「意味要件」(X と P が説明対象—説明内容という意味関係を持つこと) の両方を満たす場合であり、広義主題とは断裂要件のみを満たす場合である (堀川2012)。本稿では、断裂要件よりは X と P はどのような意味関係を持つのが重要だと考えるため、断裂要件を主題の規定から除外する。尾上 (1995) でも主題概念の広狭の差は、「説明対象」ということの内容をどう規定するのかによって異なると指摘されており、意味要件を重視しているように考えられる。
- (18) 本稿の言う狭義主題文と広義主題文は述部 P が名詞句 X に対して+属性か-属性かによって分類したものであり、堀川 (2012) で分類している「狭義主題」と「広義主題」の範囲と異なる。たとえば、堀川 (2012: 187) は「動詞文が格由来の主題も、時間的変容込みで在り方を語る」と述べ、狭義主題に分類する (例: 「山田は田中とけんかした」 p.37)。また「さめたスープは電子レンジで温めた」(p.187) のようなタイプの主語も狭義主題として捉える。本稿では、このようなタイプの文の述部 P が名詞句 X の属性とは言えないと考え、広義主題文に分類する。
- (19) 以下では、主題標示 *bol* を持つ文を「*bol* 主題文」、主題標示 *ni* を持つ文を「*ni* 主題文」と呼ぶ。
- (20) 橋本 (2006a) はおそらく *ni* の (10) のような働きを所有性が弱化し、英語の定冠詞的な機能に似ていると言い、前方照応的指示な働きを果たすと指摘する。筆者の観点では (10) のような *ni* の所有性が弱化すると言っても、完全に失われたとは言いきれないと考えられる。理由は本文で述べた通りである。

- (21) なお、～*gedeg bol*「～とは」という形の用例は11例であった。
- (22) 詳しくは清格尔泰 (1991: 384-385) を参照。
- (23) 本稿は野田 (1996) に従い、*bol* と *ni* が主題の働きをせず、対比だけを表す場合を「対比専用」の用法として分類する。
- (24) 野田 (1996) では前者のことを「明示的な対比」(p.200)、後者のことを「暗示的な対比」(p.210) と呼んでいる。
- (25) 山越 (2012: 51) によると、モンゴル語の「一部の名詞とほとんどの数詞」の語幹末に *n* が現れたり、現れなかったりする不安定の場合があると言う。それが「不定の *n*」(p.51) (「不定の *n*」の *n* は原文ではキリル文字で書かれているが、ここではローマ字転写にした) と呼ばれている。
- (26) ～*gedeg ni*「～とは」という形の用例は11例であった。なお、*ni* の主題以外の用法は橋本 (2006a,b) を参考にしている。
- (27) モンゴル語において形容詞と形動詞は名詞的に用いることができ、形動詞は「の」「こと」として訳される (山越2012)。形動詞語尾は *-γsan/-gsen*、*-qu/kü*、*-day/-deg*、*-γa/ge*、*-γči/-gči*、*-mar/-mer* のような形をしており、それぞれ「完了」、「未来」、「反復」、「未完了」、「行為者」、「様態」を表す (フフバートル1993: 215)。
- (28) このほかに題目に用いられて全体で名詞句を形成する場合、また、前方／後方照応的指示と主題標示の働きをすることもあったと考えられる。橋本 (2006b: 14) でも、*ni* の名詞化用法は「属性、状態、行為をモノ／コトとして取り立てた上で、それについてコメントする」という主題標示の機能と密接に関連し、両方の機能を併せ持っている指摘されている。
- (29) このほかに *učir ni* (～から、その理由は)、*daray_a ni* (その後)、*yerü ni* (一般に) のようにもはや固定化して用いられるタイプもある。
- (30) なお、*bol* は文頭ではなく、文末で用いられる場合は疑問詞に後接することがしばしばある。たとえば、～*kedüi bol da* ? (～いくらですか?)、～*yayu bol* ? (～何ですか?) などである。
- (31) このほかに「～のは～だ。」のように形動詞語尾に *ni* が後接するタイプで、*ni* の後半の部分、すなわち「～だ。」の部分が焦点化される用例もある。なお、ナラントヤ (2006: 35) では (21) のような *ni* を「[ほかの物ではなくてこれだけが (本である)] という排他的な意味が強く感じられる」とも述べられている。
- (32) これは「[章京] (清朝の官名)」の意味である (王1992: 619)。
- (33) 清格尔泰 (1991: 443) では“本身没有词汇意义，用来表示整个句子的语气，或为某一句子成分增添情态意义的一类虚词叫做语气词。” (それ自体には語彙的な意味がなく、文全体の語気を表すために使われたり、ある文の成分に情態的な意味を加えたりする虚詞を語気詞と呼ぶ) と述べている。
- (34) “In Mongolian, too, *n'* can function as a partitive marker, picking out part of a mass, or one item from a group.” (Hammar, Lucia B.1983: 122)。 (モンゴル語では、*n'* も部分的なマーカーとして機能し、全体の一部、またはグループから一つ

の項目を選択することができる。)

- (35) 橋本 (2006a: 408) では *ni* の主題用法を焦点用法と関連させ、「取立のスポットライトがどちらに当たるかによって、*n'* に2つの機能が与えられた」と指摘されている。
- (36) なお、「内在的属性」を「カテゴリー属性」と「所有属性」に分類し、「所有属性」をさらに「単純所有属性」と「履歴属性」に下位分類される (益岡2000)。
- (37) なお、益岡 (1987: 35) では各叙述の類型間は連続的な関係を持っているとし、属性叙述でもない事象叙述でもないタイプを「中間型」として分類する。本稿では、中間型として見られる用例を事象叙述文に分類した。理由は、中間型の用例の述部 P が－属性に近いからである。
- (38) 今回は用例を500例に限定した調査であるため、今後、用例数を増やしてさらなる考察が必要である。

参考文献

- 清格尔泰(1991)《蒙古语语法》内蒙古人民出版社。(清格爾泰 (1991)『蒙古語語法』内蒙古人民出版社)
- Hammar, Lucia B. (1983) “*Syntactic and pragmatic options in Mongolian: A study of ‘BOL’ and ‘N’*” UMI (University Microfilms International) Dissertation Information Service.
- 石居康男 (2014)「総称性」日本語文法学会編『日本語文法事典』pp.361.大修館書店.
- 王海清 (編)・橋本勝 (監修) (1992)『蒙日辞典』タカラ出版サービス.
- 尾上圭介 (1995)「「は」の意味分化の論理—題目提示と対比」『言語』24 (11), pp.28-37. 大修館書店.
- 風間伸次郎 (2003)「アルタイ諸言語の3グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)、および朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」ボビン, アレキサンダー他編『日本語系統論の現在』31, pp.249-340. 国際日本文化研究センター.
- 久野暲 (1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 賽希雅拉図 (2014)「日本語とモンゴル語の主題マーカの対照研究」大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士論文.
- 田中春美他編 (1988)『現代言語学辞典』成美堂.
- ナラントヤ (2006)「モンゴル語の主題小辞 “bol” “ni” —日本語の助詞「は」「が」との対照を通して」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』6, pp. 23-40.北海道大学大学院文学研究科.
- ナラントヤ (2010)「モンゴル語の取り立て小辞 *mini, cini, ni, cu, le, bol*—日本語との対照を中心に—」北海道大学大学院文学研究科博士論文.
- 那日蘇 (2021)「モンゴル語の主題標示 *bol* について—属性叙述文と事象叙述文の観点から—」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』360, pp.2-11. 千葉大学大学院人文公共学府.

- 丹羽哲也 (1999) 「主題文の性格と「は」の使用条件について」『人文研究』 51 (5), pp.493-520.大阪市立大学文学部.
- 丹羽哲也 (2000) 「主題の構造と諸形式」『日本語学』 4 (19), pp.100-109.明治書院.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』 くろしお出版.
- 橋本邦彦 (2006a) 「モンゴル語 3 人称所有後接語の複数の機能について」『実験音声学と一般言語学—城生伯太郎博士還暦記念論文集—』 pp.400-411, 東京堂.
- 橋本邦彦 (2006b) 「モンゴル語の 3 人称後接語のトピック標示／焦点表示」『認知科学研究』 4, pp. 7-23.室蘭認知科学研究会.
- 橋本勝 (2019) 『ニューエクスプレスプラス モンゴル語 (CD付き)』 白水社.
- フフバートル (1993) 『モンゴル語基礎文法』 インターブックス.
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』 ひつじ書房.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」『主題の対照』 pp.3-17, くろしお出版.
- 山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法 (CD 付)』 白水社.

(なりす・千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程在学)